

周興嗣と呉均の贈答詩について

—『千字文』以前の周興嗣—

* 泰田 利栄子

はじめに

梁の文人、周興嗣は、梁の武帝の命で『次韻王羲之書千字』、いわゆる『千字文』を撰述した。『千字文』は、現在でも書の手本として用いられ、優れた韻文として読み継がれていることから、「員外散騎侍郎周興嗣」の名も世に広く知られている。これまで『千字文』についての論考は日中で多く書かれてきたが、「周興嗣」に関する人物考証は、未だ充分であるとはいえない⁽¹⁾。本稿では、周興嗣と、従来の研究で「終生の友⁽²⁾」とされる呉均との贈答詩に着目し、時系列に沿って整理し読み解くことで、周興嗣の人物考証の歩を進めたいと考える。

周興嗣に比べると、同時代の寒門知識人である呉均に関する論考は多い。先行研究として、まず森野繁夫氏「梁の文學集團と個人(二)——呉均について⁽³⁾」が挙げられる。当該論文では、特に贈答詩を多く取り上げながら、呉均の「個人の文学」についての在り方を示している。続いて、山田英雄氏「呉均の文学について——森野繁夫氏の『梁の文学集團と個人(二)——呉均について』を讀みて⁽⁴⁾」が書かれた。山田氏は「伝記記述と詩論とをどちらかといえば分離して扱っている⁽⁵⁾」森野氏に対して、呉均の人生を無官時代、任官時代に分期し、詩と伝記記述とを対応させながら論述している。時を隔てて、笹岡恵美子氏が「呉均と周興嗣⁽⁶⁾」を論著した。これは呉均と周興嗣の間で交わされた贈答詩九首全てに訳注を施し、内容に基づきその順序と制作時期とを考察したものである。そして再び森野繁夫氏が「六朝の文人たち——梁・呉均⁽⁷⁾」を著したが、こちら

は森野氏旧稿に比して伝記記述を重視し、齊代後半、梁の天監初年、天監中期、天監後期と時系列で考察を加えたものとなっている。

本稿と関連性が高いのは、特に笹岡氏の論文である。中国の呉均研究にも周興嗣との贈答詩に触れたもの⁽⁸⁾はあるが、それらは主に制作年代に注目し、笹岡氏のように九首を通して二人の関係を考察するという専論は見当たらない。本稿も笹岡氏と同様の手法を用い、伝記事項と贈答詩の内容に基づいて詩の順序を整理し並べ替え、その内容を考察するものである。詩は『先秦漢魏晉南北朝詩』を底本とし、現代語訳については諸氏先行研究を、また詩の解釈は主に林家驪氏の『呉均集校注⁽¹⁰⁾』を参照した。

先行研究と本稿との大きな違いは以下の二つである。一つは、各詩篇の詩題に関して輯本の拠った総集・類書に遡って検証を行い、その上で詩の内容と照らし合わせて制作年代を考察したこと、もう一つは、森野氏(2003)、笹岡氏が、周興嗣と呉均との間で交わされた贈答詩を全部で九首と捉えたことに対し、本稿では十二首と捉えることにある。呉均から「周承」に宛てた詩が三首あり、森野氏(1969)はこの人物を周興嗣ではなく別の「不遇な友人の一人」と考えた。しかし『詩紀』の注に、「二に『丞』に作る⁽¹¹⁾」とあるように、これは南齊末に桂陽郡丞であった周興嗣とも考えられ、『呉均集校注』でも、この三首について「周丞」(すなわち周興嗣)と作るのが正しいと思われる、という⁽¹²⁾。この「周丞」の問題及び詩の制作時期については第二章で詳述する。従来の九首に、「周承」三首を加えて考察すると、贈答時期とその順序、また二人の関係について、従来の論考とは異なる様相が浮かんでくるのである。先行研究をより掘り下げることで、周興嗣、呉均という寒門出身の知識人が、いかに齊末・梁代を生きたのかを探り、果たして二人がどのような関係にあったのかについても考察を加える。

一、周興嗣と呉均の伝記事項とその地位について

まずは周興嗣と呉均の伝記事項⁽¹³⁾を整理しておこう。

周興嗣(四七〇年頃～五二一年)は字が思纂で、本貫は陳郡である。齊の隆昌年間(四九四年)に呉興太守の謝朓と文史を語り、引き立てを得て秀才に拔擢された後、桂陽郡丞となる。太守の王峻⁽¹⁴⁾はその才能を尊んで丁重に接したという。

キーワード：周興嗣、呉均、贈答詩、寒門、人物研究

*平成三二年度生 比較社会文化学専攻

梁の武帝蕭衍が即位し（天監元年、五〇二年）周興嗣は献上した「休平の賦」が武帝に喜ばれたことから、安成王の王国侍郎を拜命した。天監四年（五〇五年）に競作した「舞馬の賦」が巧みとされ、員外散騎侍郎に拔擢される。六年（五〇七年）武帝が三橋の旧宅を寄進して光宅寺とした際には、寺牌の碑文を陸倕と競作し、周興嗣の碑文が選ばれた。これより武帝は七年十月の「北伐の檄」、「次韻王羲之書千字（千字文）」などを周興嗣に作らせる。九年（五一〇年）新安郡丞となった後、任期満了に伴いまた員外散騎侍郎となり、十二年（五一三年）に給事中に昇進した。もともと風疽を患っていたが、その年流行病で左目を失明した。十四年（五一五年）臨川郡丞、十七年（五一八年）給事中。普通二年（五二一年）に死去した。

吳均（四六九〜五二〇年）は字を叔庠という。吳興郡故鄣の人で、寒門出身だった。天監二年（五〇三年）吳興太守柳惲の主簿、六年（五〇七年）建安王蕭偉（揚州刺史）の記室参军となり、九年（五一〇年）、建安王が江州刺史となったことに伴い王国侍郎に任命され、府の城局参军を兼ねる。十二年（五一三年）、都に戻り奉朝請となった。天監十四年（五一五年）、撰述した『齊春秋』を献上したが、武帝の怒りを買って免職となる。天監十六年（五一七年）前後に武帝の命で『通史』を撰し、未完のうち普通元年（五二〇年）に五十二歳で亡くなった。

二人の役職を梁の十八班官制に照らして見ると、周興嗣は梁代に安成王の王国侍郎（一班）となり、員外散騎侍郎（三班）、最終的には給事中（四班）であった。先祖を前漢の周堪、高祖父を晋の周凝とするが、曾祖父、祖父、父の名は史書等の記録に見えない。また王国侍郎は十八班官制で一番下の位だから、吳均ほどではないにせよ、やはり寒門出身と考えられる。一方史料に「家世寒賤」、すなわち寒門出身と明記された吳均が最後に就いた官職は、奉朝請（二班）である¹⁵⁾。以上、二人の伝記事項を確認した。次章では各詩篇の詩題とその変遷を示し、「周承」が周興嗣だと思われる理由と、先行研究に見える詩の制作時期について整理する。

二、各詩篇の詩題と詩の制作時期について

表 I 各詩篇の収載状況と詩題一覧（×印は未収載）

番号、第一句	藝文類聚 31	初學記 18	文苑英華 247	詩紀 82	底本
吳1 子雲好飲酒	×	×	贈周散騎興嗣 三首	贈周散騎興嗣 二首	贈周散騎興嗣詩 二首
吳2 昔賢當路者	梁吳筠贈周興嗣詩	梁吳均贈周興嗣詩	贈周散騎興嗣 三首三		
吳3 孺子賤而貧	×	×	贈周散騎興嗣 三首二	贈周興嗣四首	贈周興嗣詩四首
吳4 思君欲何言	×	×	集本有此長韻 一首與前詩間 今全錄于此	見文苑英華註	
吳5 與君初相知	×	×			吳7
吳6 可怨異公子	×	×			詣周承不值 因贈此詩 詩紀云承二作 丞。後做此。
吳7 竹枝任風轉	詣周承不值 因贈此詩	×		詣周承不值 因贈此詩 承一作丞後做此	
吳8 巨石亂天崖	遙贈周承詩	×	遙贈周丞	遙贈周承	遙贈周承詩
吳9 石渠閭無人	周丞未還 重贈詩	×	×	周承未還重贈	周承未還重贈詩
周1 明燈照暗室	×	×	文苑英華 240	×	
周2 驚鳥起北海	×	×	答吳均三首	×	答吳均詩三首
周3 昔別襄城村	×	×		×	

周興嗣・吳均ともに別集は伝わらず、総集・類書などによる明代以降の輯本のみが存する。表Iに『先秦漢魏晉南北朝詩』『梁詩』に拠って各詩篇の総集・類書における収載状況を示す¹⁶⁾。吳均が贈った詩を「吳」、周興嗣が贈った詩を「周」とし、底本の掲載順に番号を付した。

まず、吳7〜9の「周承」が「周丞」、すなわち南齊末に桂陽郡丞であった周興嗣と考えられる理由を述べる。『藝文類聚』では吳7、吳8は「周承」だが、吳9は「周丞」である。『文苑英華』では、吳8の詩題は「遙贈周丞」としている。『詩紀』の注では、「一に『丞』に作る」とある。これは「丞」と「承」を混用した可能性が高いのである。また、詩句と照らしてみても、吳1で周興嗣を「子雲

（揚雄）に喩え、呉9でも周興嗣への呼びかけに「子雲」を用いている。また呉3では呉均自身を「孺子（徐稚）」と称して、呉7でも自分を示す「豫章徐（豫章の徐稚）」を用いている。これらの詩句の対応については『呉均集校注』でも指摘されている。同書の他、黄崇浩氏、施永慶氏、張婷婷氏、崔軍紅氏ともに「周承」を「周丞」として論を進めており、こちらが現在の通説と言えるだろう。

周興嗣が呉均に宛てた周1～周3には特筆すべき事項はないため、次に呉1～呉6について整理する。

呉2以外は、『藝文類聚』『初學記』には収めず、『文苑英華』で収載された詩で、同書は詩題「贈周散騎興嗣三首」として呉1から呉3を載せた後、「集本有此長韻一首與前詩間有同處今全錄于此（呉集には次の長韻一首があり、前の詩と同じところがあるため、ここに全て録す）」と、呉3・4・5・6を載せる。呉3が重複した詩である。更に『詩紀』で整理が加えられ、「長韻一首」は「贈周興嗣四首」に分けられた。底本は『詩紀』の分け方を継承している。

呉2は全ての本に収載されている。呉2の詩題は、『藝文類聚』で「梁吳筠贈周興嗣詩」、『初學記』で「梁吳均贈周興嗣詩」と周興嗣であったものが、『文苑英華』で周散騎興嗣となっている。周興嗣の最終的な役職は給事中だが、一般的には『千字文』を撰した時の役職「員外散騎侍郎」として知られる。『文苑英華』が編纂された時、周興嗣に宛てた詩をまとめ、詩の制作時期にかかわらず「周散騎興嗣」としたとも考えられるのである。

このように詩題にも整理と変更が加えられているため、必ずしも詩題が当時の役職そのものとは言えない。よって筆者は、詩の制作時期は、詩題に加え詩の内容と伝記事項とを勘案した上で述べられるべきだと考えている。

続いて、先行研究に見える詩の制作時期について整理したい。笹岡氏の論考では、呉7～9への言及はなく、呉1～6、周1～3までを配している。順序は呉1→呉2→呉3→周3→呉4→周2→呉5→周1→呉6である。始めの呉1は天監十三年頃、梁武帝に退けられた呉均が、失明して一時的に官職を退いた周興嗣に贈った¹⁷とし、二人の贈答詩は、晩年、報われないお互いを思いやって交わされたと捉えている。森野氏は贈答詩の順序に言及してはいないが、この九首を「いずれも呉均が武帝の機嫌を損ねていた天監末の作¹⁸」と考えている。以下、「周承」を別人とし、制作時期を天監末としたこの二説をA説と呼ぶ。また、年表と

各説とを対応させた表IIを参照されたい。

中国の先行研究では、主に詩の制作年代に注目している。まず黄崇浩氏（以下B説とする）は、齊代永泰元年から永元元年¹⁹（498～499年）、呉均が桂陽郡を訪れた際に詩を贈り、郡丞周興嗣が答えた（周3）とする。梁代天監元年に、周興嗣が安成国侍郎となったことを聞き、呉均がまた周興嗣を訪問したが会えず、呉7、呉9を贈ったという。天監四年（505年）、周興嗣が員外散騎侍郎となったことと呉均が春から夏にかけて周興嗣を訪問し呉2を贈ったと考えている。

C説は、施永慶、林家驪（『呉均集校注』）、崔軍紅諸氏で、当該説は齊代建武四年（497年）に呉3～呉9、周1～3がやりとりされ、天監四年（505年）に呉1、呉2が贈られたと捉えている。詩題に基づきおよその年代を示したのと言えよう。

B説、C説共に、主題は呉均の年譜を整理することにあるため、詩句の対応に関するいくつかの指摘はあるものの、周興嗣と呉均の関係性について詳しい考察を加えていくわけではない。特にC説は詩題を単純に制作時期の根拠としたことにより、詩の内容との矛盾が生じている。例えば呉1を天監四年としているが、この詩は周興嗣を子雲（揚雄）と敬通（馮衍）

表 II

年代	年	周	呉	事項	本稿
齊代	建武四年	497	497	謝朓が周を宣伝	呉1
	隆昌元年	494	494	交わりを結ぶ	呉3
梁代	永泰元年	498	498	この頃	呉4
	永元元年	499	499	周、秀才に挙げられる	呉5
	永元二年	500	500	桂陽王（峻）、周、桂陽郡丞	呉6
梁代	天監元年	502	502	周、安成国侍郎	呉7
	天監四年	505	505	周、員外散騎侍郎	呉8
	天監十二年	513	513	周、給事中、左目を失明	呉9
	天監十四年	515	515	周、免職となる	呉2
天監末	天監十七年	518	518	周、給事中	呉1、2
	普通元年	520	520	周、周卒	呉3

注：A説（天監末）は、周興嗣が武帝の機嫌を損ねていた天監末の作とする。B説（齊代）は、齊代永泰元年から永元元年（498～499年）とする。C説（梁代）は、梁代天監元年に、周興嗣が安成国侍郎となったことを聞き、呉均がまた周興嗣を訪問したが会えず、呉7、呉9を贈ったというとする。

に、呉均自身を、子雲の先輩にあたる司馬相如に喩え、詩の内容も「共作失職人」である。周興嗣が「員外散騎侍郎」となった天監四年頃は、梁武帝に引き立てられて華やかだった時期で、その時期に呉1を贈ったとすれば疑問が生じるが、C説にはそれについての言及がない。また、A説は、呉1を二人が共に失職していた天監十三年ごろという。確かに周興嗣は重篤な病に罹患したが、失職の記録はなく、天監十四年には臨川郡丞となっている。九首の内容自体、晩年にお互いを思いやったりとりだとは考え難く、斉末の三首を加えると尚更である。

筆者は十二首の順序を、呉1↓呉3↓呉4↓周3↓呉5↓周1↓呉6↓周2↓呉7↓呉9↓呉8↓呉2だと考える。その時期は、呉1が二人共無官であった隆昌年間(494年)以前、呉3↓周2は隆昌年間(494年)以降永元元年(499年)頃まで、呉7↓9は永元二年(500年)頃、最後の呉2は天監四年(505年)頃である。呉1↓6については、呉2を除いて『文苑英華』の収載順とした上で、あいだに内容からみて周興嗣の返答作と思われるものを周3・1・2の順に配し、その後「周丞(承)」を宛名とする呉7・9・8を置き、呉2を最も遅い作とした。

三、贈答詩十二首について

それでは時系列に整理した十二首を確認していこう。人名と制作順を考える上で目を留めるべき典故には横に○を付した。便宜上、呉1↓周2をグループ1、呉7↓呉2をグループ2とする。また紙幅の関係上、原詩と現代語訳のみ付す。

グループ1

呉均「贈周散騎興嗣詩二首」一「呉1」

子雲好飲酒。家在成都縣。製賦已百篇。彈琴復千轉。敬通不富豪。相如本貧賤。共作失職人。包山一相見。

子雲⁽²⁰⁾(揚雄)はよく酒を飲み、その家は成都県にある。賦を作ることもはや百篇、琴を弾くことさらに千転。敬通⁽²¹⁾(馮衍)は富豪ではなく、相如⁽²²⁾(司馬相如)はもともと貧賤である。揃って正当な地位を得られず、太湖の包山で一同に会す。

呉均が贈った九首の内、他の八首は周興嗣が上、呉均が下という身分差を感じさせるが、この詩は、周興嗣を子雲(揚雄)と敬通(馮衍)に、呉均自身を、子雲と同郷の先輩にあたる司馬相如に喩えている。揚雄は賦を作るとき司馬相如の賦を手本としたというから、嘗ては周興嗣が呉均に学ぶ場面があったのかもしれない。この三人を挙げて「共作失職人」とする部分は、「正当な地位が得られない」と解釈した⁽²³⁾。地位が得られないなら、世俗を離れて太湖の包山(洞庭西山)で会おうと述べる。この詩は周興嗣、呉均共に無官の二十代前半に贈られたと考えられ、子雲は呉9、敬通は呉4でも周興嗣を示す人物として使われる。

呉均「贈周興嗣詩四首」一「呉3」

孺子賤而貧。且非席上珍。唯安菜蕪餼。兼慕林宗巾。百年逢繼絕。千里遇殷勤。願持江南蕙。以贈生芻人。

孺子⁽²⁴⁾(徐稚)は身分が賤しく貧しい、そして「席上の珍(宝物)」でもない。ただ飯に塵を置くような貧しい生活⁽²⁵⁾に甘んじるのみで、しかも林宗⁽²⁶⁾(郭泰)を慕っているのだ。百年も待ったとばかりに逢えば離れず、千里も隔たっていたかとはかりに遇えば親しく交わる。江南の蕙(かおり草)を手にして賢人に贈りたいと思う。

呉均は自らを孺子(徐稚)に喩え、周興嗣を郭泰(字は林宗)に喩える。また自分の貧しさを、食べる物にも事欠き飯に塵を生じたという范冉の故事に例える。郭泰も家柄が貧賤だったが、かつて雨に濡れ、その巾が垂れ下がったのを人々が真似たほど慕われていた。「以贈生芻人」は『後漢書』徐稚伝にあるように、孺子(徐稚)が郭泰の母が亡くなった際「其の人玉の如し」を意味する生芻を贈ったことを踏まえている。呉均は、呉7でも自分を「豫章徐」と称している。

呉均「贈周興嗣詩四首」二「呉4」

思君欲何言。中心亂如霧。淚下非一端。愁來誰有數。子爲馮敬通。不減汲長孺。千里無關梁。安得王喬履。

貴君のことを考えて何か言いたいと思うけれども、心の中が乱れて霧に覆われてしまったようだ。涙が落ちること果てしなく、やってくる悲しみは、誰

が限りあるなどと言うのか。あなたは馮敬通（馮衍）であり、汲長孺（汲黯）にも劣らない。千里の道のりにあなたという仕官に通じる関門や橋も無ければ、どうして王喬のくつ²⁸を得て参内することができようか。

呉1の敬通（馮衍）を再び挙げる。また汲長孺（汲黯）は病気がちだったが、漢武帝から古の社稷の臣に近い、と評された。周興嗣はその汲長孺にも劣らないとする。寒門出身の自分にとって仕官することは千里の道のりに匹敵する。仕官に通じる関所の門や、橋がなければ（すなわち周興嗣がいなければ）、どうにもならない、という。王喬が神術でくつを番のカモに変え参内したという故事を用いて仕官の困難さを強調している。呉3、4からは周興嗣を仰ぎ見るような表現に変わっていることから、隆昌年間（四九四年）以降、周興嗣が桂陽郡丞として着任するまでに書かれたものだろう。友が先に出世してゆき、取り残された気持ちを詩に託すが、同時に周興嗣に対して、仕官への橋渡しをして欲しいという強い願いが現れている。

周興嗣「答呉均詩三首」三「周3」

昔別襄城村。同會長安市。誰學萊蕪賦。本得王喬履。塔前養素鶴。池中飴赤鯉。一往玉壺上。兼復見蕭史。

かつて私達は襄城の村で別れ、共に長安市でまみえた。誰が范冉を真似ようと言うのか、貴君はもともと王喬の履を備えているではないか。きざはしの前で白い鶴を養い、池の中では赤い鯉を養っているようなものだ。一度月の上に行き、その上でまた蕭史²⁹に会いたいと思う。

呉均が贈った呉3、呉4と対応する詩句「萊蕪賦」「王喬履」から、この二首への返答と考えられる。仕官への橋渡しを望む呉均の訴えかけに、真正面から答えず躲しているような返答である。呉均と同じく寒門出身の周興嗣に、当時呉均の橋渡しをする力は無く、こう答えるより他なかったように見える。仕官できる實力はもともと持っているであろうと相手を立てる。また王喬の履からの連想で、蕭を吹いて白鶴を庭に呼び寄せ、最後には鳳凰と共に飛び去ったという仙人の蕭史を呉均に喩える。

呉均「贈周興嗣詩四首」三「呉5」

呉君初相知。不言異一宿。意欲褰衣裳。陰雲亂人目。之子伏高卧。伊予空杼軸。無因渡淇水。見此猗猗竹。

貴君と初めて相知となった頃、一晚ですら離れるとは言わなかった。心は衣裳のすそをかかげて会いに行きたいと望むけれども、雨雲が私の心を乱してしまふ。この方は安定した地位でゆったりと過ごされるが、この私は杼も軸も空にするほど貧しい。淇水を渡るすべもなく、あの美しい竹を目にするのがかなわない。

呉均から周興嗣に対して、初めて心を許しあったころは極めて親密だったが、身分の違いができて会いに行くことも出来ないと思嘆く。

周興嗣「答呉均詩三首」一「周1」

明燈照暗室。邊韶對趙壹。但酌中山酒。唯甘江浦橘。風動雲入箕。雨至月離畢。王丹贈不拜。是我相知日。

明るい燈が暗い部屋を照らすように邊韶³⁰は趙壹³¹と向かい合う。ひたすら中山酒（千日の酒）を飲み、江浦の橘を味わい満足するばかり。風が動くのは、雲が風を司る箕星に入り、雨が降るのは月が畢星にかかったからである。王丹は陳遵に拝礼しないことを贈った³²。これが私の相知となった日だ。

今度は周興嗣から見た相知の日を語る。文章の才で知られ、弁舌が巧みだった邊韶を呉均に喩える。才を恃んで倨傲だったことから排斥されたり、後に罪に問われ死にそうなところを友に助けられたという趙壹を周自身に喩えている。知り合った頃は出世や仕官のことに煩わされず、ただ酒を酌み交わし橘を味わう単純に仲の良い関係だったという意を含むか。「贈不拜」は、王丹が匈奴の使者となった陳遵に贈るものがない為、丁重に拝礼しないことを贈ったという故事を指し、まるで王丹と陳遵のように何も持たない我々二人だった、という。

吳均「贈周興嗣詩四首」四「吳6」

可怨異公子。終自不敢言。青松蔽南隴。白雲生北園。沈憂無人語。默念空憑軒。安得湛盧劍。以報相知恩。

我が身が貴公子でないことが怨めしい、とうとう自分からは言うことができなかつた。青々とした松は南の畝をおおい、白い雲は北の園林に生じる。深い憂いに沈み語らうこともなく、黙って考え込みただ欄干に寄りかかっている。なんとか湛盧の劍³³を得て、相知の恩に報いたいものだ。

自分の境遇に絶望を滲ませながらも、吳均が訴えたいのはやはり仕官のことであろう。湛盧の劍は、越の欧冶子が作り、吳王闔閭がこれを得たが、闔閭が無道だった為に楚の昭王のもとに移ったという宝劍である。この宝劍を手にして、つまり仕官して周興嗣に報いたいという。

周興嗣「答吳均詩三首」二「周2」

驚覺起北海。儀鳳飛上林。騫低不同翼。歡楚亦殊音。暄暄夕雲起。落落曉星沈。李陵報蘇武。但令知我心。

驚き飛び立つ野鴨は北方の海（最遠の地）から飛び立ち、鳳凰は天子の庭園を飛ぶ。高くまた低く飛ぶのは、（鳳凰と野鴨では）その翼が異なり、喜びと苦痛の鳴き声もまた異なるのだ。日が陰って暗いところから夕雲は起ち、まばらに寂しく暁天の星は沈んでゆく。李陵が蘇武にお答えする³⁴のは、ただ自分の考えをお知らせしたいからだ。

現存する中で周興嗣から吳均に贈った最後の詩である。吳6「可怨異公子」の流れで、貴公子と寒門を対比させ、寒門出身者の出世の厳しさを述べている。李陵を周興嗣、蘇武を吳均とすることで二人を同じ報われぬ側に置き、「我々は、寒門出身者として弁えよう」と伝えている。同時に、仕官を焦る吳均を諫め³⁵、仕官活動を手助けする気はないと暗に示している。

ここまでがグループ1で、二人が親しかった頃である。吳1は、揚雄と司馬相如との対比で吳均の優越を思わせるが、二首目以降は二人の立場が変わったように考えられる。吳均は二人の結びつきを何とか自分自身の仕官に役立てたかった。

ある時は相手を讃え、友情を強調し、またある時は絶望してみせる吳均に対して周興嗣は周3・周1では正面から答えていないが、周2では吳均を諫めている。「但令知我心」という言葉が周興嗣の誠意であり、答えは「寒門としての立場を弁えること」だった。

次のグループ2は、周興嗣が桂陽郡丞に着任した後の吳均詩三首と、梁代に入ってから最後の一首である。

グループ2

吳均「詣周承不值因贈此詩」「吳7」

竹枝任風轉。蘭心逐風卷。青雲葉上團。白露花中泣。聞君入綺疏。聊寄錦中書。一隨平原客。寧憶豫章徐。

竹の枝は風にくるくると回されるがまま、君子の心は激しく吹く風に従って乱される。青雲は木々の葉の上に集まり、白露は花の中に滴っている。貴君は美しい窓のうちにいると聞いたから、ひとまず錦字書（貴君を慕って贈る文）を贈ろう。ひとたび平原君のようなパトロンを得たあなたは、もはや豫章の徐稚たるわたしのことなど思い出してくれない。

吳均は、桂陽郡丞となった周興嗣を遙々訪ねたが、会うことができなかつた。あるいは、周興嗣の方は会うつもりがなかつたのだろうか。謝朓や王峻という名門貴族に認められ前途洋々たる周興嗣に対して、吳3と同様に徐稚を用い旧情に訴えかけたが、次の詩を見ると返答はなかつたようだ。

吳均「周承未還重贈詩」「吳9」

石渠閭無人。子雲今何在。顧望獨懷憂。銜杯竟誰待。散雪逐吹寒。蓬姿浮霜采。甘泉無竹花。鵝鷓欲還海。

石渠は静まりかえって誰もいない、子雲（揚雄）は今どこにいるのだろう。振り返って望み独り憂いを抱き、杯の酒を口に含んで（私は）一体誰を待つと言うのか。散る雪は吹寒（吹雪）に従い、蓬姿は霜の彩を浮かべる。甘泉には口にすべき竹の花がないのだから、鵝鷓（鳳凰のひな）は海へ還ろうと思う。

呉均は再び周興嗣を訪れたが、やはり会うことは叶わなかった。「子雲好飲酒」でも挙げた子雲（揚雄）を再び周興嗣に喩えている。前に訪問したのは「白露」の秋⁽³⁶⁾で、この詩では季節は冬に移り変わっている。甘泉宮は秦代の離宮を漢の武帝が増築したもので、揚雄は「甘泉賦」を作った⁽³⁷⁾。諦めて帰るしかない呉均のやるせなさを滲ませている。

呉均「遥贈周承詩」「呉8」

巨石亂天崖。雜樹鬱參差。伯魚留蜀郡。長房還葛陂。練練波中月。亭亭雲上枝。高岑蔽人者。無處得相知。

巨石が天の果てを乱し、雑木が入り混じり茂っている。伯魚⁽³⁸⁾（第五倫）は蜀郡に留まり、長房⁽³⁹⁾（費長房）は葛陂に還る。真っ白な波中の月、高くそびえる雲上の枝。高い山の峰が人を蔽ってしまうなら、友人を得る場所など、どこにも無い。

後漢の官僚である伯魚（第五倫）を周興嗣に喩え、方士の費長房を呉均に喩えている。仙人修行に失敗した費長房は壺公にももらった竹の杖に跨って汝南の家に還り、葛陂に捨てたところその杖は龍だったという故事から、この詩は呉均が桂陽郡からの帰途贈った詩だと分かる。二人は高い山の峰に隔てられ、既に友人とは呼ばなくなってしまった。ところで呉均の詩には「王桂陽」に宛てた「贈王桂陽」⁽⁴⁰⁾「贈王桂陽別三首」があり、森野氏⁽¹⁹⁶⁾、山田氏は周興嗣を通じて「王桂陽」に接点を持ったと指摘している。また森野氏は「王桂陽に贈りて別る」詩には「寒族出身の悲哀を移入したような、暗い自然風景が詠われている」とし、山田氏は同詩から悲痛な挫折の思いを読み取っている⁽⁴⁰⁾。これらの詩は呉7、呉9と同時期に贈られ、呉均は「王桂陽」にもその部下「周丞」たる周興嗣にも相手にされなかったと考えられる。

呉均「贈周散騎興嗣詩二首」二「呉2」

昔賢當路者。聲名振華夏。朱輪玳瑁牛。紫轡連錢馬。朝花舞風去。夜月窺窗下。想君貴易朋。居然應見捨。

昔なじみの賢者たる君は今や重要な地位につき、その名声を華夏に轟かせた。

朱塗りの車を引くべつ甲で飾った牛、紫の鞍をつけた連錢馬。朝開く花はつむじ風に吹かれて去り、夜の月は窓下をそっと覗き見る。想像するところ、貴君は高官の地位と友とを交換したのだ。あるうことか、恐らく（私は）捨てられたのだろう。

武帝の時代が始まり、周興嗣は「休平の賦」で安成王の王国侍郎、天監四年（五〇五年）には員外散騎侍郎に抜擢された。一方当時の呉均は、呉興太守柳惲の主簿にはなったが周興嗣ほどの活躍はみせていない。嘗ては「不言異一宿」だった周興嗣が手の届かない存在となり、桂陽郡での門前払いとも言える出来事を経て、呉均は愛憎や葛藤を感じたであろう。「昔賢當路者」という大げさな賛辞には皮肉を、「想君貴易朋」には周興嗣に対する痛烈な批判を含む。桂陽郡での三首、また周興嗣が抜擢された時期を踏まえ、この詩を天監初期、呉均から周興嗣に最後に贈られたものと判断した。

おわりに

寒門出身の二人の関係は、果たして先行研究で述べられたような「終生の友」だったのだろうか。筆者は、もつと複雑な関係にあったと考える。二人は若い頃には親密であった、しかし、謝朓の引き立てを得て浮上し仕官した周興嗣と、なかなか浮上できなかった呉均とはその関係に歪みが出てくるのである。呉均の詩には、時には相手を褒め称え、時には哀切を込め、周興嗣との友情関係をなんとか仕官への足がかりに繋げたいという強い気持ちが見える。一方の周興嗣は、それを躲したり諷刺したりした後、郡丞として桂陽郡に着任した。呉均もその後桂陽郡へと赴き、周興嗣とその上司である王峻に詩を贈ったがうまくはいかず、周興嗣に会うことすらできなかった。周興嗣が会わなかったのは、本人の意向だったか、王峻の顔色を反映したものか、はたまた齊末の混乱期にそれぞれどころではなかったのかは定かでない。しかし呉均は周興嗣に怒りや恨みにも似た感情を抱き、最後の詩で「想君貴易朋」と述べるのだった。

その後も、梁武帝に近侍し『千字文』の制作を命じられた周興嗣と、『齊春秋』の撰述を巡って武帝の怒りを買った呉均とで、二人の差は更に顕著になってゆく。

若き日の二人の贈答詩からは、南斉末期に於ける寒門出身の知識人の様相を伺うことができる。特に、著名でありながらもその人物研究が余り進んでいない周興嗣について、『千字文』以前の姿が垣間見えるのである。

〔註〕

- (1) 泰田利栄子「周興嗣の人物考証から見る『千字文』編綴時期」(『人間文化創成科学論叢』第二十三巻、二〇二一年)は、『梁書』『南史』によって周興嗣の人物考証を行い、『千字文』編綴時期と、蕭子範『千字文』との関係を考察した論考である。周興嗣の人物像については主に当該論考を参照した。
- (2) 森野繁夫「六朝の文人たち―梁・呉均―」(『中國學論集』第三十四號、二〇〇三年)、四頁。
- (3) 森野繁夫「梁の文學集團と個人(二)―呉均について―」(『日本中國學會報』第二十一集、一九六九年)。当該論考は、同氏「六朝詩の研究」第四章(第一学習社、一九七六年)に収録されている。
- (4) 山田英雄「呉均の文学について―森野繁夫氏の『梁の文學集團と個人(二)―呉均について―』を讀みて―」(『名古屋大学文学部研究論集』五十二、一九七一年)。
- (5) 前掲註(4)論文、四頁。
- (6) 笹岡恵美子「呉均と周興嗣」(『山本昭教授退休記念中国学論集』、白帝社、二〇〇〇年)。
- (7) 前掲註(2)論文。
- (8) 黄崇浩「呉均生平与著述考索」(『文献』四期、一九九八年)。施永慶「呉均行年著述考略」(『山東師大學報』第五期、一九九九年)。張婷婷「論呉均的贈答詩」(『齊齊哈爾大學學報』五期、二〇一五年)。崔軍紅「呉均年譜簡編」(『河南科技學院學報』第三十六卷、二〇一六年)。
- (9) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、二〇一七年)。
- (10) 林家驪校注『呉均集校注』(浙江古籍出版社、二〇〇五年)。
- (11) 馮惟訥『王古詩紀』(王雲五主編『四庫全書珍本』三十二卷、台灣商務印書館、一九七一年)。
- (12) 前掲註(10)書、一五九頁。
- (13) 中華書局版の『梁書』(一九七三年)、『南史』(一九七五年)、周興嗣は前掲註(1)論文、呉均は前掲註(10)書、前掲註(2)、(4)論文等を参照。
- (14) 『梁書』周興嗣伝は「王峻」に作り、校勘記で『冊府元龜』を引き「王峻」だろうという。本稿はこれを受けて「王峻」で統一する。
- (15) 宮崎市定『九品官人法の研究 科挙前史』(中央公論社、一九九七年)、三三八頁を参照。
- (16) 歐陽詢『藝文類聚』(中華書局、一九六五年)、『宋本藝文類聚』(上海古籍出版社、二〇一三年)。徐堅『初學記』(新興書局、一九六六年)、同(中文出版社、一九七八年)。彭叔夏『文苑英華』(華聯出版社、一九六五年)。「詩紀」は前掲註(11)書。

- (17) 前掲註(6)論文、一〇九頁。
- (18) 前掲註(2)論文、十四頁。
- (19) 黄氏は、周興嗣が桂陽郡丞となった時期を永泰元年から永元元年(498~499年)と考える。しかし楊徳才「梁代作家二考」(『中国韻文学刊』第一期、一九九九年)は、王峻が桂陽太守となった時期から、周興嗣は永元二年(500年)桂陽郡丞になったと示している。寒門出身者として三十歳以降の仕官が妥当であり、本稿も桂陽郡丞の時期を永元二年ごろと考える。
- (20) 『漢書』卷八十七、揚雄伝(中華書局、一九六二年)。
- (21) 『後漢書』卷二十八、馮衍伝(中華書局、一九六五年)。
- (22) 『漢書』卷五十七、司馬相如伝(中華書局、一九六二年)。
- (23) 前掲註(10)書、一四八頁では「楚辭」を挙げ、「失職」は学識と職位が合わないことという。
- (24) 『後漢書』卷五十三、徐穉伝(中華書局、一九六五年)。
- (25) 『後漢書』卷八十一、范冉伝(中華書局、一九六五年)。
- (26) 『後漢書』卷六十八、郭太伝(中華書局、一九六五年)。李賢注に范曄は父の名を避け「太」としたとある。
- (27) 『漢書』卷五十、汲黯伝(中華書局、一九六二年)。
- (28) 『後漢書』卷八十二、王喬伝(中華書局、一九六五年)。
- (29) 劉向「列仙伝」蕭史(『百部叢書集成』六五、藝文印書館、一九六七年)。
- (30) 『後漢書』卷八十、邊韶伝(中華書局、一九六五年)。
- (31) 『後漢書』卷八十、趙壹伝(中華書局、一九六五年)。
- (32) 『後漢書』卷二十七、王丹伝(中華書局、一九六五年)。「東觀漢記」(王雲五主編『叢書集成簡編』八四五、台灣商務印書館、一九六五年)、王丹伝「更始時。遵爲大司馬護軍。出使匈奴。過辭於丹。丹曰。俱遭時反覆。惟我二人。爲天所遺。今子當之絕域。無以相贈。贈子以不拜。遂揖而別。遵甚悅之」。
- (33) 『越絶書』越絶外伝記宝剑第十三(『百部叢書集成』六六、藝文印書館、一九六六年)。
- (34) 『六臣注文選』第二十九卷、雜詩上(中華書局、一九八七年)に李少卿「與蘇武詩三首」が載る。
- (35) 『梁書』卷一、武帝紀上「且聞中間立格。甲族以二十登仕。後門以過立試吏……」。とあるように、齊代、後門(寒門)出身者は通常三十歳過ぎて任用されていた。
- (36) 前掲註(10)書、一五九頁。
- (37) 前掲註(10)書、一六二頁。
- (38) 『後漢書』卷四十一、第五倫伝(中華書局、一九六五年)。
- (39) 『後漢書』卷八十二、費長房伝(中華書局、一九六五年)。
- (40) 前掲註(3)論文四頁、前掲註(4)論文。

周興嗣與吳均之間的贈答詩 —《千字文》以前的周興嗣—

泰田 利榮子

齊梁文人周興嗣為《千字文》的編撰者，雖然馳名中外，但目前對其人物研究之相關資料仍為數不多。本論文將周興嗣與吳均之間的十二首贈答詩，依時序整理後，再針對贈與時間及內容進行考察。

周興嗣和吳均都是寒門士人，年輕時關係很親近，吳均就曾以「不言異一宿」來表達兩人之間的關係。可是獲得謝朓讚賞而仕途一路順遂的周興嗣與仕途不順的吳均之間關係產生變化，漸漸疏遠。南齊末，吳均前去拜訪時任桂陽郡丞的周興嗣卻無法見面，因此吳均在送給周興嗣的最後一首詩中寫道「想君貴易朋，居然應見捨」。透過兩人年輕時的十二首贈答詩，可以了解在南齊末年間，出身寒門的知識份子的狀況，特別是能夠一探在編撰《千字文》以前的周興嗣。

關鍵詞：周興嗣，吳均，贈答詩，寒門，人物研究